



HANABI

—「建学の精神」の授業の一コマ

大雑把に歌謡曲といわせてもらいますが、私の若い頃は、流行り歌^{はや}というのと、好きとか嫌いとか、逢うとか別れるとか、そんな男女の機微を謳った曲が多かったように思います。何故、そうした歌が多かったのかといえば、そうした心情を好む、そこに聴衆がいたからでしょう。

ところが、そうした歌詞が流行り歌から消えて、特に若い人が一種の人生の応援歌のようなものを好むようになってきたと感じるようになったのは、いつの頃からでしょう。若い人が恋とか愛に関心がなくなってしまったとは思いませんが、好きとか嫌いとか、逢うとか別れるとか、その時その場のあてどない感情ではない、むしろ何か生きる支えになるようなものを欲しがっているのかなあ〜と漠然と感じたことがありました。

最近そんなことをあらためて実感したのは、建学の精神の授業の一コマのことでした。それは、私が「ミスターチルドレン」という音楽グループの「花 —Memento-Mori」という歌を話題にした時のことです。この歌は、青春がひと時で、危うげなものであることを知っているからこそ、「負けないように 枯れないように 笑って咲く花になろう」と、目の前の青春の輝きを際立たせようとする内容になっています。メインタイトルの「花」にさりげなく添えられているサブタイトルの「メメント・モリ」とは、「死を忘れるな」という古いラテンの言葉ですが、その淵源は、『旧約聖書』の「詩篇」(第90篇12節)にある「われらにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させてください」の章句といわれています^{*}。

「時を大切に」といった話のくだりで、そんな歌を紹介したところ、ある学生が「先生、ミスチルの『花火』っていう歌を知っていますか。私は、『花火』が一番好きなんです」と。私は、知らなかったものですから、「ボクは知らないんだけど、ちょっと唄ってみてくれる」といいました。急に人前で唄えといわれても、誰だって困惑するのは私でも解るものですから、「そうだ、君、スマホもっているだろう。YouTubeで『花火』って引いてごらん。このマイクを貸すから、みんなに聴こえるように教室中に流してくれない」と。今は便利な時代になりました。

聴いた印象は、多様な事柄がかなり複雑に絡み合った歌詞といったもので、そのやや難解な意味を私なりに出来るだけ歌詞に忠実に紐解いてみますと、こんな風に聴こえてきました。

世界や人生にどれくらいの値打ちがあるんだろう、ひょっとすると無意味なのかも知れない、そう問いかけてみることもある。でも、すぐに我に返って、そんなことを考えてしまうなんて、ちょっと疲れてんのかなあ、と思いなおす。僕だって、心の底では、決して人生も世界も無意味なんかではない、そう思っているんだ。

これまで切り捨ててしまった大切なものもあったけれど、そのことに後悔もありはするけれど、でも、それを何時までも引き摺っていても、生きていけないし、世の中も待っていてくれはしない。理想を描けっといわれても、希望を抱けっといわれても、そう簡単には答えを出しようもないその問いは、日常の喧騒に置き去りにされていく。

そんな時、君がいてくれたら、何ていつてくれるだろう。僕に何かをいつてくれる友達がいることは確かなことだ。今いなくても、その柔らかな笑顔を僕に向けてくれる友達がどこかにいることは確かなことだ。

不安に満ち、波乱に満ちた世界であっても、問題は、その世界を僕がどれだけ愛することが出来るかっていうことだ。それが一瞬の裡に消えてしまう花火のような光であったとしても、もう一回、もう一回と、繰り返し繰り返し、その希望の光を手を伸ばして掴んでみようよ。誰だって悲しみを抱えて生きているけど、でも誰だって素敵な明日を願っているんだから。

自分は考え過ぎてしまって言葉に詰まることがある。そのもどかしさ、自分のギコチナサに苛立ちは感じているよ。でも、だからといって器用に生きようとは思わない。

人生に終わりがあり、いつか「さよなら」が迎えに来ることは、初めから僕にだってわかっているよ、たとえ日常の喧騒に流されているとしても。時は全てを平等に呑み込んで流れていつてしまうけれど、かすかに未来からの呼び声が聴こえないかい。だから、もう一回、もう一回と、繰り返し繰り返し、その希望の光を手を伸ばして掴んでみようよ。

独りでいる時よりも、君とめぐり逢えたことで、世界がこんなに美しく見えるなんて。人は、人と一緒に生きているから、こんなに幸せを感じる事が出来るんだ。問題を抱えているのは僕だけではないんだね。みんなそうなんだね。それにも拘わらず、みんな素敵な明日を願って生きようよと、そう思っているんだよね。洗われながら透き通っていく水のような心で生きていきたい。

だから、人生も世界も無意味なんてでは決してないんだよね^{***}。

今の若い人って、こんな歌を好むんだと、若者たちの心のヒダをあらためて教えてもらったように思いました。

※参照：田辺元著「メメント モリ」（田辺元全集第一三巻所収）筑摩書房。

***参照：Mr.Children 編「Your Song」文藝春秋。

[>前のページへ戻る](#)